

中国語時態接尾辞 de について

金丸邦三

中国語の完了態はふつう動詞接尾辞「了」や「過」などによって表わされる。ところが、「彼はいつ北京に着いたのか」という問に対する答として、「彼は昨日北京に着いたのだ」という時、中国語では、  
他昨天到的北京。

と言い、また、「君は何を書いたのか」という問に対して、「ぼくは詩を書いたのだ」と答える時、中国語では、  
我写的詩。

の如く言って、いずれも「了」を用いないのが普通である。このような時、なぜ「了」を用いないで「的」*de* を使うのかということについては、ほぼ次のような説明がなされるだろう。即ち、これらの「的」は過去の事実について述べるものではあるが、表現の重点は動作そのものにはなく、動作・事態が到

達・実現されたこと、ないしは現存していることを承認した上で、それに附随した事柄について述べるものである。この点、動作・事態の完了、ないしは新事態の開始に重点を置く「了」とは異なるのである。このことは、同一句中で「的・了」をはっきり使いわけている「働着友良今天替他上的夜班、现在又接着上了夜班」(『千万不要忘记』)の如き例によって自から明白であろう。

では、この種の「的」は、歴史的に見た場合、如何にしてこのような機能を持つようになったのであろうか。また、このような「的」に語法上どのような地位を与えるべきであらうか。

二

いま現代中国語に於ける「的」の用法を見るに、派生的な特殊なものを除いて、ほぼ次の七類にまとめることができよう。

- (a) 状語に接尾する  
慢慢儿的走
- (b) 定語に接尾する  
我的書 白的紙 買書的人
- (c) 名物化する  
我的 白的 買书的
- (d) 句末に置いて語気を示す  
他不会害儂的
- (e) 動詞に接尾し、既に起こった動作を承認した上で、それに附随する事柄を説明する

他昨天到的北京 儂写的甚麼？

(f) 動詞に接尾し、動作の行われた場所・到達点を示す

主席团坐的台上 跑的那兒

(g) 動詞に接尾し、補語を導く

哭的眼都紅了

これら「的」の来源を近世中国語に求めると、(a)は地、(b)(c)(d)は底、(e)(f)(g)は得、この三つを得ることが出来る。このうち、本稿で考察の対象とするのは主として(e)の「的」であるが、いまこれを改めて「de」と記すことにする。(但し、引用例についてはそのままにする。)

さて、この de の来源については従来あまり考察されていないが、「底」とするのが一般のようである。太田辰夫氏は、『中国語歴史文法』に於て、de の来源は必ずしも明かではないがと断りつつも、「これは『地』の系統をひくものであるはずはないから、『底』か『得』のどちらかということになる。助動詞の『得』が完了をあらわすものは元明にもある。しかし、以上の例からみて、これが『得』から出たこととは無理であるように、『是』が多く用いられるところからみて、同動詞句の『是……的』の形式をとるものの変型とみるべきで、したがって、『的』は『底』の系統に属すといふべきであろう。」と、de の来源を「底」であると推定されている。そこで挙げられている例は次の五つである。

(1) 儂写的甚麼病？(『張天師』2)

(2) 書童小奴才、穿的誰的衣服？(『金瓶梅』35)

(3) 既是這等起的病、儂如今只不要氣、慢慢的將養。(『冤家債主』2)

(4) 儂是那裏討来的藥？(『金』50)

(5) 他家大娘子、也是我說的媒。(『金』3)

これらの「的」|| de が「得」から出たことは無理であるようだ。太田氏は述べられているが、その根拠については何ら説明されていない。ただ、この種の文には「是」が多く用いられていることから、同動詞句「是……的」の形式の変型とみるべきだとされている。しかし、これについてはなお検討すべき問題があるように思われる。

### 三

まず(1)(2)に於ては、「是」を補うと普通の同動詞句になると太田氏は言われる。つまり、これを裏がえせば、この種の文では「是」が省略されているのだということになる。このように説く学者は他にも少なくないが、果して妥当であろうか。「是」を補うことにより、構造と意味に変化があることはいま敢て問わないにしても、ではこれと同じ構造の次の如き例は、一体どのように説明したらよいのであろうか。

ア、儂是指的甚麼？(『千万不要忘記』)

イ、儂這是画的甚麼呀？(『一家人』)

ウ、儂這是說的甚麼話？(『嫦娥奔月』)

エ、真是過的甚麼日子！(『少年遊』)

これらの「的」|| de はその前後と固く結びついていて、もは

や「是」を補うことはできないし、かと言って、後程検討する(3)(4)(5)例のような修飾連語のものともちがう。とすれば、(1)(2)の如きもこれら諸例と同様、「的」の後の「是」が省かれたものとするのは妥当でなからう。また、かりに「是」が省略されたものとするならば、(1)(2)の「害的」「穿的」は(c)類に属するものということになり、それがなぜ初めに述べたようなもの機能を持つのか説明が困難になるであろう。かくて、(1)(2)の如きを同動詞句の省略形と見るのは妥当ではなく、従って、その「的」の来源を「底」とするのは正しいとは言えない。

次に(3)(4)(5)を検討することにしよう。このうち(3)は「是」の主語が見えないが、文脈から想定し得る「儻」を補って考えることにする。これらの例は主語と述語を等号で結べないので、普通の同動詞句とは認め難い。(「我是来看儻的」の如きは、当議論の対象とはならない。)そこで太田氏はこれを「同動詞句の非論理的表現」とされている。そして、(3)(4)から「的」とその後だけを切取ってみると、「這等起的病」「討来的菓」は修飾連語の名詞的なものと指摘されている。これらの「的」の来源が何であるかは特に明言されていないが、名詞を修飾している以上当然「底」とされるのであろう。とすれば、これらの例を「同動詞句の非論理的表現」と見ることにはずぐさま賛成しかねる。なぜなら、これらの「的」は、先に分類した「底」系の(b)類に属して定語に接尾する「的」とは本来別のものと考えられるからである。それは、例えば、「這是誰買的書？」に対する答としての「我買的書」と、「儻買的甚麼？」

に対する答としての「我買的書」とを比較してみれば自から明瞭であろう。同じく「我買的書」でも、この二つの中の「的」は全く別個のものなのである。「起的病」「討来的菓」「說的媒」などは、実はむしろ支配連語と言うべきであるが、形式上の類似から名詞的修飾語と混同されて、主語との間に「是」を挿入で非論理的な同動詞句を構成するようになったものであろう。

この種の混同は、或はもっと一般的な性格をもつものと考えられる。いま敢て大胆な想定を試みるならば、等しく「動詞十の十名詞」の型をとっていても、これを歴史的に見れば、異った二つの系統のものが混同—統合されたものではないか。即ち、例えば、「煎(菓)的人」の如きものと、「煎的菓」の如き「的」を取り去ると支配構造をなすものとは、現代語では等しく名詞的修飾連語と見なされるが、本来は別個のものだったのではないか。前者の「的」は明かに「底」系のものであるが、後者は「得」系のものであったのが、それが「底」「得」が「的」に統合される過程で、後者が前者に吸収されていったものではなからうか。この推定を力づけるものとして、次のような例がある。

昨夜念経、更不是別人、即是新買到賤奴念経之声。(敦煌变文：『岫山遠公話』)

「新買到賤奴」は「到」を介して動賓構造の修飾連語となっているが、この「到」が「得」に、更に「的」になったものと考ええるのは無理であらうか。また、これを逆に見るなら、「娶的媳婦兒、也姓李」(東堂老の)の如きは、「娶得媳婦兒、(他)

也姓李」から修飾連語化したものとは考えられないだろうか。このような混同による同化は、本来獲得・結果を表わす「得」系の、補語を導く「的」についても生じている。例えば、「他写的好」の「写的好」を主述構造と見るのがそれである。このことは「的」の同一性に関する大きな問題に係ることであり、本稿の意図はそこにはないので、この問題についてこれ以上深入りするつもりはない。ただ、誤解を招かぬよう一言すれば、ここでは、「起的病」などを、現代語の次元で、名詞的修飾連語と見るか否かを論議しようとしたのではなく、歴史的に見て、これらの「的」が「底」系のものであるとは考えられぬということと言いたかったのである。

さて、(3)(4)(5)の「起的病・討来的葉・說的媒」などは、外見上名詞的修飾連語の如く見えても、実は形式上の類似から混同されているだけであり、従って、これらの「的」もやはり「底」系統のものとすることはできない。このことは、「他去年結的婚」の如き明かに支配連語を構成するものや、「他昨天到的北京」の如き用例に於て一層はつきりするであろう。いまこの種の用例を若干挙げて見よう。

- オ、不知弄的甚麼鬼？（『金』50）
- カ、他前天搬的家（『少年遊』）
- キ、這是充的哪家子大方？（『青松嶺』）
- ク、五二年俺倆一塊進的廠（『新故事集』）
- ケ、團子年年是五好社員、新近入的党（『千万』）
- コ、我是前天約的他（『同』）

サ、為抗美援朝捐獻是我們工人帶的頭（『春華秋爽』）  
 以上の諸例の「的」は、どう見ても「底」系統のもとは考えられない。なぜなら、例えば、ケ・コに於ける「入的」「約的」がそれぞれ党・他を修飾していると考えるのは滑稽だからである。

人或はこれらは(1)と(5)例の如きものの影響を受けてできた特異なものと言われるかも知れない。それは考えられることである。とすれば、これらを以て(1)と(5)を説明するのは論理の倒錯であると言うだろう。しかし、(1)と(5)、アとサ各例は、文型に多少の差異はあっても、それらの「的」の機能は終始共通しているのである。その機能は初めに説明した通りであるが、それは「底」からはずいぶん説明できないものである。

の想定し得る来源が「底」と「得」しかないとするならば、「底」ではない以上、当然「得」ということになる。そして、「得」は確にのに対して強い親近性を持っているのである。そこで、次に「得」との關係について考察することにしてしよう。

- (1) 曾毅夫『的の字底用法与分化』（河北人民出版社）では、「他唱的甚麼歌？」を「他唱的是甚麼歌？」と解し、倉石武四郎「現代語法における二三の問題」（『中国語学』128）でもこの見解を支持されている。
- (2) 「說的媒」については、太田氏はこれらと區別して支配連語と見ている。しかし、これらを修飾連語とする太田氏の立場からすれば、説媒と同義の做媒に、「這媒做得好」

〔金〕2) 「老身做了一世媒」(同上)の如き用例がある以上、殊更区別する必要はないのではなからうか。

(3) 『北京口語語法』一八頁脚註、王力『中国語法理論』第14節。

四

獲得の意味をもつ動詞「得」は、漢代には他の動詞に後置されるようになり、やがて唐代になると完全に接尾辞化して可能を表わす「得」を派生するに至り、更には「得」の後に補語を後置するようになった。一方、なおその本来の意味と動詞性を保ちながらほぼ接尾辞化した「得」も長い間広く用いられていた。例えば、

宇文綬接得書、展開看。(『簡貼和尚』)

近臣拾得看時、上有幾句言語。(『宣和遺事』)

奪得人口牛羊馬匹回來了。(『虎頭牌』3)

などがそれである。これらの「得」は明かに事物の獲得を意味するが、次の如き例では、それが知覚的な獲得を意味している。

那皮匠婦人也知得錯認了。(『錯認屍』)

正研墨、覺得手重。(『簡貼和尚』)

聽得有人説、因此來看。(『合同文字』)

また、獲得の概念は、これを一步推し進めると、動作・事態の到達・実現を意味する。

到得來年、一舉成名了。(『簡貼和尚』)

我出的衙門來、試看咱。(『魔合羅』4)

只見婆子行得數步、再走回來。(『洛陽三怪』)  
過得衆安橋、失却了女子所在。(『彩鸞燈伝』)  
授得右相都巡官帶武功郎。(『宣和遺事』)

なお、到達・実現と可能とは概念的には極めて近接したものであるから、次の如きいづれとも決し難い用例も少くないのである。

懶捨的宋引章、我一發嫁備。(『救風塵』3)

這兩日才吃的好些兒了。(『金瓶梅』38)

妾身是兒女夫妻、怎下的藥殺男兒？(『魔合羅』2)

老漢是寒家、急切裏不會備的喜酒。(『李逵負荆』3)

これら諸例ではみな「的」に作っているが、それはこの時期に接尾辞化した「得」などが音韻変化により「的」字で表記されるようになったためで、特に意識的なものであったのではない。それは、例えば、「拳頭上也立得人、臆腫上走得馬、人面上行的人」(『金瓶梅』2)の如く、「得・的」が混用されている例が多いことから言えることである。

さて、到達ないしは実現された動作・事態は、その結果に重点を置くと言語結果補語をとることになる。

賺的我去取塩醋。(『寶娥冤』4)

將毒藥藥的親夫身故。(『魔合羅』3)

害的我不茶不飯、只是思想着懶。(『救風塵』3)

那個女子看的懶中意了。(『張生煮海』3)

冬天替懶妹子温的舖蓋兒煖了。(『救風塵』1)

懶看他叫的爹那甜。(『金瓶梅』32)

脱的・衣服早了、冒了些風寒。(『魔合羅』1)  
 拿起把荆子来、打得殺猪也似叫。(『簡帖和尚』)  
 潘松看見了、說得魂不附体。(『洛陽三怪』)

これら諸例中、初めの三例は「的」に導かれた結果補語が主述構造をなし、その主語と「的」の前の動詞とが支配関係を持っている。これらは句形式から見れば、むしろ兼語式に近いものである。次の例では、「中意」の主語は「儂」ではなく、「那個女子」であって、これはむしろ連動式に近いものである。その次の三例では、賓語の後に補語が来て、現代語の標準的な結果補語式とその語序が異なる。これらの賓語を、「把月娘哄的满心欢喜」(『金』・32)の如く提前する用法が時代の下ると共に優勢になっていったのであろう。最後の二例は、賓語ないしは補語連語の主語が省略されている形である。いずれにせよ、以上の諸例では、賓語或は補語連語の主語と「的」の前の動詞とは支配関係を持ち、「的」は到達・実現された動作・事態の結果の叙述に重点が置かれているのである。

ところが一方、結果の叙述に重点を置かずに、動作・事態が実現されて現存すること、或は持続していることを承認する言い方がある。

シ、可是他說的有孩子屋裏熱鬧。(『金瓶梅』31)  
 ス、我前日見儂這裏打的酒、道吃不上口、我所以拏的這羅酒来。(同38)

セ、家裏備的幾件菲儀、聊表千里驚毛之意。(同55)  
 ソ、父親母親好小手兒也、則与的儂這些東西。(『合汗衫』1)

シの「說的」は只「言った」というのではなく、現にそう「言っている」というのであり、ス・セの「拏的・備的」も「(現に)持って来ている・用意してある」というのであるし、ソはこの句の前に、「老爹与我十兩銀子、一領綿团襖、……。」という句があつて、「与えた」ということはすでに承認ずみのことなのである。これらは先に挙げた「到得来年」以下五例の如きものとつながるものである。

さて、実現された動作・事態の承認と言つても、多くの場合は、承認すること自体に目的があるのでなく、承認した上でその動作に附随した事柄について述べようとすることになる。次の諸例の如きが即ちそれである。

タ、儂怎的笑、我倒說的正經話。(『金瓶梅』35)  
 チ、儂道花箋上写的甚麼文字？(『彩鸞燈』)  
 ツ、誰知他幹的甚麼營生。(『金瓶梅』50)  
 テ、是那一個下的毒藥？(『寶娥冤』2)  
 ト、敲得半日門、才有人出来。(『金瓶梅』54)

これらの例では、それぞれ「説・写・幹・下・敲」という動作が現に行われたこと、ないしはその結果が持続していることを承認した上で、それらの動作に附随した事柄<sup>1)</sup>傍線部分を述べているのである。これらの例が、先に示した太田氏の挙例(1)と(5)と何ら異なる所ないこと、もはや言うまでもないだろう。ここまで発展した「的」が、即ち先に幾つかの「的」の用法中(e)類に分類された「的」、つまり<sup>2)</sup>の<sup>3)</sup>なのである。

以上の考察によって、<sup>4)</sup>の<sup>5)</sup>の来源を「得」とするのが妥当で

あることがわかった。そこで最後に、現代語法の中で、*de*をどのように取扱ったらいいかについて一言しておきたい。

五

*de*が「底」系統のものではなく、「得」を来源とするもので、而も現代語に於ても、先にも述べた如く、「這是誰買的書？」に対する答えとしての「我買的書」と、「儂買的甚麼？」に対する「我買的書」とは、表面的には同じ形をしていても、これら二つの「的」は別個のものであるからには、後者の「的」*de*を(b)(c)類の「的」と同じに扱うことは妥当でない。では、この *de* をどう処遇したらよいだらうか。

もうかなり前のことだが、『中国語文』(1961・12)に朱德熙氏が「説的」と題する論文を発表し、それをめぐって意義深い論争が展開されたが、ごく最近にも、言一兵氏が「区分的同音素問題」(1965・5)「関于動詞后綴的」(1965・①)と題する二論文を相繼いで発表している。後の方は前論文を部分的に補足したものであるが、実はいま問題にしている *de* の取扱いについて有益な示唆を与えてくれるものである。言氏の論文では *de* の歴史的考察は全くなされてないが、この *de* は朱氏の言う「名詞性的后附成分」とは同一のものではないことを鋭く反論した後、*de* は同じく動詞に接尾する「了・過」とその性質が類似している点を指摘し、最後に、「如果承認『了・過』是動詞的后綴、那末『的』也是動詞的一種后綴。」と結論している。「了・過」の類似性については、何も言氏に

よって初めて指摘されたわけではない。『現代漢語語法講話』にも、この *de* は過去の事柄について言うのだと述べられているし、倉石先生の前掲論文にも、「了」と *de* との差異について適切な説明がなされているのは、勿論その類似性を意識されたことと思われる。

「了」が動作の完了、ないしは新事態の開始を、「過」が動作の過去を意味し、且つ共に動詞に接尾するという点で、*de* と親近関係を持つことは言氏の指摘の通りであるが、ここで更に次の諸点を追加指摘しておきたい。先ず、同じく動詞に接尾する「着」にも *de* と類似する点がある。例えば、「儂手裏拿着甚麼東西？」の「着」は「儂手裏拿着甚麼東西？」の「着」に近似している。ただ、この種の「着」は *de* とは異り、実現された動作・事態の持続そのものに視点が置かれ、描写性が極めて強いのである。次に、「台上坐着主席团」を言い換えた「主席团坐在台上」や「主席团坐得台上」の「在」「得」の如きも *de* に類似したものを持つ。第三には結果補語を導く「得」であるが、これについては既に前節で述べた通りで、もはや説明を要しないであらう。

*de* 及び「了・過・着・在・得」などが等しく動詞に接尾して、動作の時間的様態、即ち時態を表わす機能を持つということから、これらを「時態接尾辞」とするのが適当であると考え

(一九六六・二・二〇) (一橋大学講師)